
ケイタイデンワ

黒い羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケイタイデンワ

【Nコード】

N1368A

【作者名】

黒い羊

【あらすじ】

二つの時間軸に存在する人生を同時に生きる男。危うく、脆い世界で生きる彼の頼みの綱は、たった一つのケイタイデンワ。

プロローグ

2005年 7月24日

「コレ、持ってて。使い方は後で教えるから」

そういうと、目の前の少女は握りこぶしくらいの大きさの「物体」を俺に渡した。

「何コレ？」

あ、しまった。また、何か間抜けな質問をしたのだろうか。

少女は何とも言えない複雑な表情をしながら、とにかく持ってて、と言った。

蝉の異常なまでの鳴き声のせいもあるのか、それとも俺の彼女に対する感情がそうさせるのか、彼女の声はとても美しかった。

しばらくの間、彼女は俺に渡した「物体」と同じ様な「物体」を何やら真剣な表情で、だが慣れた手つきで操作していた。

ブルブル！

「うわっ！」

突然、俺の手の中にあった「物体」が震えだした。

何とか落とさずにすんだが、俺の手の平の上で、震え続ける「物体」、そして慌てる俺の様子を見つめる少女。

その表情が、さらに複雑な感情を帯びた様な気がする。

「何コレ？」

俺はもう一度、彼女に同じ質問をした。

「ケイティデシワ」

と、少女は何やら楽しそうに、そして少し得意げに言った。

????年 11月3日

今、何時くらいだろうか。

周りが明るいように感じるが、室内灯のせいなのか、昼ごろだからなのか。

混濁する意識の中、母親が顔をクシyakシヤにしながら泣いているのが見えた。

ただの一回の親孝行もせず、それどころか散々心配させられた挙句、自分よりも先に人生を終えようとする息子をどう思っているのだろうか。

その母を、いつも苦虫を潰した顔をしている父が目を真っ赤にして支えている。

ああ、あなたには散々叱られたけれど、そうやって泣かれているだけの方がよほど辛い。

そして、今まさに息を引き取ろうとしている俺の手を、ずっと握ってくれている妻の姿がぼんやりと見えた。

泣き虫だという事を気にしていた彼女。

気にするだけあって、本当によく泣いた。

だが、俺が彼女を泣かせたのは、おそらくこれが初めてだろう。

穏やかな彼女と喧嘩する自分の姿が想像できず、よく笑う彼女を悲しませる自分の姿も想像できず、いつかは彼女を泣かせてしまうのだろうかとよく考えた。

その彼女と結婚したのが、ちょうど1年前。

いい加減な自分が、まさかこんな早くに結婚出来るとは思いもしなかった。

ましてや、誰かの父親になるなんて。

「加奈、お腹・・・、触らせて」

思うように出ない声を、引き絞りながら俺は妻に言った。それを聞いた加奈は、弾けたように泣き出してしまった。

「加奈・・・」

俺はもう一度、彼女に呼びかけた。

彼女のお腹の中には、新しい生命が宿っている。

先日、産婦人科で診察してもらったら女の子だという話も聞いている。

泣きはらした目をしながら加奈は、うんうんと何度も頷きながら、自分の腹に俺の手を当ててくれた。

「女の子か。父親としては心配のかたまりだな。ふふ・・・」

それを聞いて、また泣き伏してしまった。

落ち着くのを待ってから、俺は彼女の頭に、そっと触れた。

「この子に・・・、名前を・・・」

加奈から、子供が女の子と知らされた時から、ずっと考えていた名前。

いや、考えたのではなく、「彼女」に貰った名前か。

俺は、最後の力を振り絞って、未だ見ぬ娘の名前を呟いた。

そして、俺の意識は途絶えた。

プロローグ（後書き）

最近なかなか忙しく、執筆に時間を割きにくいのですが、頑張って完結させようと思っていますので、長い目で付き合ってくださいませ。

リダイヤル1

2005年 7月26日 AM11:23

「おい、あんた。こんな所で寝られると困るんだけどね!」

いきなり肩を掴まれ、驚いて怒声を浴びせかける相手の方を見た。

俺はどうやら寝ていた様だ。寝ぼけた頭で相手の姿を見る。

警察の様な格好をしているが、少し違う。どちらかというと警備員に近い。

道を往来する人間達が、俺の方をちらりと見るが、そのまま気にも留めずに過ぎ去っていく。

怒る男の肩越しに駅が見えた。この男は駅員か。

警察を呼ばれない内に、この場を立ち去った方が良さそうだ。

そうだ、大事な事を忘れるところだった。これだけは確認しておかなければ。

俺は駅員らしき男に尋ねた。

「今日は何月何日ですか?」

すると、駅員は少し面食らった表情をしたが、すぐに不機嫌な顔になった。

「7月26日だよ!」

26日?あれから2日しか経っていない。どうやら、調子は良さそうだ。

男の顔を見ると、かなり若い。と言うよりも俺よりもかなり年下じゃないか?やれやれ。

「ありがとう」

俺はそう言って、「所持品」である鞆を持ち上げた。

すると、何やら違和感を感じる。どうやら鞆のサイドポケットに、何かが入っている。

こんな所に何か入れたっけか?ポケットを探る。

出てきたのは二日前に、あの子から貰った物体だった。
あ、そうか。あの子に貰ったんだっけか、確か・・・、ケータイデ
ンワ。

多分、こいつのお陰で『寝過ごさずに済んだ』のかも知れないな。
とにかく、俺が帰ってきた事を彼女に連絡しよう。

電話番号をメモった紙は、確か財布に・・・。

それにしても、どうして公衆電話がこんなに少ないんだ？

俺みたいな人間には、電話するにも一苦労じゃないか。
ブルルル！

「うおっ！」

思わず声を出す。ケータイデンワが震えている。

あっ、そうか。これも電話なんだっけか。

えっと、確かどのボタンを押しても通話モードになるんだっけか？
ピッ！

「もしもし？」

慣れない手つきで取ったケータイデンワから、あの子の声が聞こえ
る。

「すげえ。やっぱ、これって電話なんだな？」

純粹な感激とともに、ケータイデンワで話す自分の姿がひどく滑稽
に思えた。

通り過ぎていく人の視線もやたらと気になる。

すれ違ってサラリーマン風の男と目が合ったが、男はすぐに過ぎ去
って行った。

彼にとっても、ケータイデンワで話すという行為は日常なんだな。

まあ、当たり前か。

「もしもし？」

あの子の声が少し尖がっている。

「あ、ごめん」

「どう？少しは慣れた？ケータイ」

ケータイ？ああ、ケータイデンワをケータイと略して呼ぶのか。

「ごめん、まだちょっと」

「みただね。それより昨日はどうしてたの？昨日って言い方じゃ不自然かもしれないけど」

彼女の理解力と順応性は大したものだ。

「まあ、色々有ってね。徹夜だったんだよ」

すると、電話の向こうで少し間が有った。

「もしもし？」

「あ、うん」

返事が返ってきたが、また沈黙。

デンパの調子が良くないのだろうか？

確か、ケンガイだと通話出来ないって言ってたけど。

でも、一昨日の説明では地下や山奥に入らなければ大体は大丈夫だって。

「『そっち』の方はかなり危険な事になってるの？」

どうやらデンパは通じている様だ。

「いや、まだまだマシな方だよ」

「マシって……」

彼女の声が更に曇ってしまった。

言い方が良くなかったか。

「とにかく一度合流出来るかな？彼氏とデートじゃなければけど」後半の冗談は内心ヒヤヒヤしながらだったが、上手く冗談に聞こえただろうか。

「夕方からなら大丈夫。今から学校の補講受けに行くから」

「補講かあ」

「……別に成績が悪くて受けるんじゃないからね。特進クラスは全員必須なんだから」

「あ、いや別にそういう意味じゃ」

俺の内心を見抜くとは、この子はエスパーか。

「とにかく補講が終わったら、ケイタイに連絡するから。電池は大丈夫だよな？」

電池？電池の残量ってどうやって見るんだっけ？

でも、あれから全然使っていないし、多分大丈夫だろう。

「ああ、うん。大丈夫、大丈夫」

「じゃあ、また夕方に」

プツ、ツツ、ツツ、ツツ。

ケイタイデンワは便利だな。

それにしても、夕方に合流か。約4時間程度・・・、大丈夫だよな。

俺はケイタイデンワをポケットに突っ込んで、歩き出した。

リダイヤル1（後書き）

5話くらいで完結させたかったのに、しばらく続きそうやなあ。・
・眠たいZZZZZZ

リダイヤル2

????年 10月15日 AM2..30

プルルル!プルルル!プルルル!

こんな夜中に電話?

夜中の電話というのは背筋が凍る。

身内の緊急事態、酔った友人から電話、・・・もしくは、間違い電話。

出来れば3番目であって欲しい。2番目なら、まだ許せる。1番目だけは御免こうむる。

「何?」

電話のコール音で目が覚めたのか、加奈が起きてしまった。

「はい、もしもし」

自然と声がこわばってしまう。

「宮下か!」

「橘?もう夜中だぞ」

その声は会社の同僚の橘だった。しかし、酔っている様子は無い。

俺は内心全ての予想が外され、橘の用件が何なのか意味不明に興味
が沸いた。

「宮下、すぐ会社に来てくれ!第3ラボで爆発事故が起きたらしい」

「爆発?」

隣で聞いていた加奈の表情から眠気が一気に引いた。

「爆発って、どうして!爆発する様な物なんてラボに置いて無いだ
ろっ」

「詳しい話は車でする!今からお前の家に迎えに行くからっ」

「あ、ああ。分かった」

受話器を置く。爆発ってどうして。

困惑する俺の視野の端で加奈が心配そうに俺を見ている。

「どうも会社で事故があったらしい」

「爆発って言ってたけど？ 大きな爆発なの？」

「いや、それは分からない。今から橘が車で迎えに来てくれるから、その道中で事情は聞く」

「会社に行くの！？ 爆発してるのに？」

「ラボには爆発する様な物は置いてないんだ。だから内部からの爆発じゃなくて、外部からの爆発かもしれない」

それを聞いて加奈が余計に怯えてしまったので、しまったと思った。「心配しなくても大丈夫。日本みたいな呑気な国に産業スパイなんか居やしないよ。それに、産業スパイのターゲットになるような物なんて開発していないはずだ。」

何とか加奈を安心させ、寝るように宥めた。

だが、見送りだけはすると云ってくれるので、二人で橘の到着を待つことにした。

しかし、俺は内心言いようの無い不安にかられていた。

加奈には産業スパイが狙う物など無いと説明したが、実は一つある。実際、「アレ」が何なのか俺も他の職員も知らされていないのだが、今回の開発が開始された時から、ラボの端っこに置かれており、邪魔だから移動させようとする、上司から止められた。しかし、実際「アレ」を誰かが触っているところなど見た事も無い。

考えすぎか？ 最近、映画を見すぎて発想が突飛になっているのかもしれない。

しかし、先ほどから俺の第六感が得たいの知れない何かを感じていた。

リダイヤル2（後書き）

この話に立ち寄って下さって頂いてありがとうございます。ここから物語的に深みを増していく予定なので、今後とも宜しく願います。＜br＞良かったら感想ください。無反応はやっぱ寂しいですから・・・。

リダイヤル3

?????年 10月15日 AM3:36

俺達が会社に到着したときには、既に警察とマスコミの連中であつた返していた。

俺達の会社があるのはビルの27階だが、下から見上げただけでは被害の状況は分からなかった。

俺達はビルの中央口の前に立ち塞がっている警察に近づいた。

「爆発があつた会社の職員の者です。通してもらえませんか？」

予想通り警察は俺達を一瞥してから面倒臭そうに、

「駄目駄目！また爆発が起きるかもしれないからね。それに爆発のあつたフロアは跡形も無いらしいから、行くだけ無駄だよ」と跳ね除けた。

跡形も無い？それほど大きな爆発だったのか？

「では、状況だけでも教えてもらえないですか？確かにうちの会社で爆発が起きたんですか？」

しかし、これまた俺の予想通り、

「俺にも詳しい事は分からないよ。とにかく下がって！」

仕方なく、俺達は野次馬の中に入る事にした。

すると、隣に中年のやたら目つきの鋭い男が近づいてきた。

「あんたら、爆発が起きた会社の職員の人？」

マスコミ関係者か？

詳しい状況が分かっていない現段階で余計な事は言わない方が良さそうだ。

「いえ、違います」

俺の返答を聞いて、橘が俺の方をチラリと見たが、すぐに俺の意図を理解したのか、何も言わなかった。

だが、男は食い下がってきた。

「そうかい？でも、さっき警察と何やら言ってたみたいだけど？」
やっぱり見てたのか。

「あれは、この野次馬の原因が何か聞いただけですよ」
俺が取り合う気が無いのを悟ったのか、男はフンと言って離れていった。

「なかなか上手い切り返しだったな」
橘が苦笑いしながら俺の方を見ている。

そこで、俺はある事を思い出した。

「橘、お前さっき俺に電話してきた時、第3ラボで爆発が起きたって言ってたよな？」

不意を突かれた様に橘は目を見開く。

「お、おお。そうだけど？」

「それ誰から聞いたんだ？さっきの警官は本当に詳しい事情を知らなかったみたいだし、外部に情報が漏れてるとは思えないんだが」

「俺に電話してきたのは、ビルの警備員だけど？」

「警備員？警備員がどう言ってきたんだ？」

「どうって……、『警備スタッフの者ですが、おたくの会社の第3ラボで爆発が起きたみたいなんです。至急来ていただけませんか？』ってな具合だったけど」

それを聞いて俺は背筋が寒くなった。

俺の様子を見て、橘も気付いたようだ。

さっきの警官は、俺達の会社のフロアは跡形も無いって言っていた。そんな状況で、警備員はどうやって『第3ラボで爆発した』と知ったんだ？

リダイヤル3（後書き）

現在の時間、朝の6時26分。徹夜で書いてしまった（汗）

リダイヤル4

2005年 7月26日 PM4:38

今日は暑い。

あの子の下校を待つ間、俺は彼女の学校の近くに建っているマンションのフロントに座っていた。

日陰で涼んでいる俺の前を、3人組の小学生くらいの少年達が通り過ぎていく。

真ん中の少年が持っている携帯ゲームを残りの二人が覗き込みながら、何やら必死に話している。

その様子を見ながら、俺は自分の小学生時代を思い出していた。

あの頃、両親の都合で俺は住み慣れた都会を離れ、東北地方のある田舎町に引っ越した。

住み慣れてはいたものの、都会での生活に未練は無かった。

友達は一人もいなかったし、外に出る事無く、いつも一人家に籠もっていた。

そんな俺の様子を見て、母親はいつも悲しそうな顔をして、

「お友達はいないの？」

と俺に言った。

傷つきはしなかったが、母親の悲しそうな顔を見るのが耐えられなかった。

だから、引っ越すと両親から聞かされた時は、友達を作る良い機会だと、俺には珍しく前向きな考えを持つことにした。

だが、結局友達は出来なかった。

何もしなかった訳ではなかった。

転校するや否や、近くの席になった生徒に、必死になって話しかけた。

人と話す事が苦手な俺が、誰かに話しかけている様はさぞかし滑稽だったのだろう。

間もなくクラスの人気者が俺を笑い者にする様になった。

こうなってはお手上げだった。

折角、友達になる兆しが見え始めた連中も、人気者に睨まれるのを恐れて俺を避け始めた。

結局、卒業するまで一度も自分の家に友達を連れて行く事は無かった。

その頃から俺は嘘をつくようになった。

週末になると、母親に心配をかけまいとして、

「今日は、○○君の家に遊びに行つて来る」と嘘を行つて家を出た。母親は嬉しそうに俺を見送ってくれた。

「今度、○○君を家に連れておいで」

母親の嬉しそうな声を背中に受けながら、玄関のドアを開ける。

夕方まで一人で過ごす時間は、異常な程長かった。

母親に聞かれた時の為に、架空の友達○○君と何をして遊んだかを必死に考えた。

夕方の公園で一人ブランコに乗っていると、たまらなく悲しくなつて、よく泣いた。

だが、あの頃を思い出してももう涙は出ない。

『心の傷は消えません。だから相手を傷つける事を言つてはいけません』

俺が孤立していたクラスの担任がよく道德の授業の時に言っていた言葉だ。

この教師は生徒の人気を得たいが為に、クラスの人気者に取り入り、一緒になって俺を笑い者にしていた。

『心の傷は消えません。だから相手を傷つける事を言ってはいけません』

クラスの連中は頷き、俺は窓の外を見ていた。

あの教師はどうしているのだろう。あのクラスの連中はどうしているのだろう。

あの頃を思い出すたびに、俺の心臓から黒い血液が流れ、全身を駆け巡る。

『心の傷は消えません。だから相手を傷つける事を言ってはいけません』

なるほどね。確かにアンタは『傷つける事を言って』はいない。

膝に顔を埋める。

そこに見えるのは影で真っ黒になった足だけだ。

「黄昏れてるね」

突然の呼びかけに驚いて顔を上げる。

目の前に、制服姿の彼女が立っていた。

リダイヤル4（後書き）

はあ、疲れたゝ（涙）

リダイヤル5

????年 10月15日 AM3:40

凄まじい勢いで燃え続けるビルに消火活動は難航していた。

炎に焼き尽くされ、建物の一部が崩れ落ちる度に無責任な野次馬達が歓声とも悲鳴とも取れる声を上げる。

だが、俺の目はそんな野次馬達をよそに、ビルの1階にある警備スタッフ駐在室を見ていた。

少しずつ冷静さを取り戻しつつある頭で今までの事を整理していた。警備員が第3ラボの統括責任者である橘に緊急の為に連絡をしてくるまでは納得できる。

だが、どうやって第3ラボで爆発が起きたと知ったのか。

俺達の会社は危険物を取り扱っている会社ではない、火災などが起きた時の事を考えて会社全体で一つ程度の警報機で十分のはずだ。

ラボ一つ一つに警報機を設置していたとは考えにくい。

まさか、橘が嘘をついているとも思えないし、嘘をつく意味が無い。そこまで考えるとやはり連絡してきた謎の警備員の不気味さが浮き彫りになってくる。

しかし、警備員に確認しようにも消火活動の進行具合を見る限りバリエードが解除されるには、まだしばらく時間がかかりそうだ。

「ココでこうしていても仕方ない、お互い一度家に戻ろう。少し仮眠も取りたいし」

俺は炎に見入っている橘に呼びかけた。

「そうだな。どちらにせよこの調子じゃ今日は仕事にはならないだろうしな。部長から連絡が

来たら、お前にも連絡するよ」

「ああ、頼む」

橘に自宅に送ってもらっている最中もずっと警備員の事を考えていた。

とにかく朝になったら、警備の人間に確認しよう。

ドラマや映画の様なサスペンシ的な事が自分の周りで起こるとは考えてはいないが、やはりどうにも気になる。

だが、もし今回の事が事件ならば、やはり原因は「アレ」なんだろうか？

それも爆発させて吹き飛ばしてしまわなければならない程の物なんだろうか？

「着いたぞ」

橘の声が俺を現実に戻した。

「あ、ああ。サンキュ」

橘に礼を言って車を降りた。

上を見上げると自宅の明かりが点いている、どうやら加奈は眠らずに待っていたようだ。

加奈にどうやって説明するか考えながら、俺はエレベーターのスイッチを押した。

リダイヤル5（後書き）

随分久々の投稿になってしまいました。

話の内容を忘れてしまった方は是非1話から読んでみてくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1368a/>

ケイタイデンワ

2010年10月20日13時22分発行